

妙法蓮華經。藥艸諭品。第五

爾の時に世尊、摩訶迦葉及び諸の大弟子に告げたまわく、善哉善哉、迦葉、善く如來の眞實の功德を説く、誠に所言の如し。如來復無量無邊阿僧祇の功德あり、汝等若し無量億劫に於て説くとも盡くすこと能わじ。

迦葉當に知るべし、如來は是れ諸法の王なり。若し所説あるは皆虚しからず。一切の法に於て、智の方便を以て之を演説す。其の所説の法は、皆悉く一切智地に到らしむ。如來は一切諸法の歸趣する所を觀知し、亦一切衆生の深心の所行を知つて、通達無礙なり。又諸法に於て究盡明了にして、諸の衆生に一切の智慧を示す。

迦葉、譬えば三千大千世界の山川・溪谷・土地に生いたる所の卉木・叢林及び諸の藥艸、種類若干にして名色各異り、密雲彌布して徧く三千大千世界に覆い、一時に等しく澍ぐ。其の澤、普く卉木・叢林及び諸の藥艸の小根・小莖・小枝・小葉・中根・中莖・中枝・中葉・大根・大莖・大枝・大葉に洽う。諸樹の大小、上中下に隨つて各受くる所あり。一雲の雨らす所、其の種性に稱うて生長することを得て、華果敷け實なる。一地の所生・一雨の所潤なりと雖も、而も諸の艸木各差別あるが如し。

迦葉當に知るべし、如來も亦復是の如し。世に出現すること大雲の起るが如く、大音聲を以て普く世界の天・人・阿修羅に徧ぜること、彼の大雲の徧く三千大千國土に覆うが如し。大衆の中に於て是の言を唱う、

我は是れ如來・應供・正徧知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊なり。未だ度せざる者は度せしめ、未だ解せざる者は解せしめ、未だ安ぜざる者は安ぜしめ、未だ涅槃せざる者は涅槃を得せしむ。今世・後世、實の如く之を知る。我は是れ一切知者・一切見者・知道者・開道者・設道者なり。汝等天・人・阿修羅衆、皆此に到るべし、法を聽か

んが爲の故に。

爾の時に無數千萬億種の衆生、佛所に來至して法を聽く。如來時に是の衆生の諸根の利・鈍・精進・懈怠を觀じて、其の堪うる所に隨つて、爲に法を説くこと種種無量にして、皆歡喜し快く善利を得せしむ。是の諸の衆生、是の法を聞き已つて、現世安穩にして後に善處に生じ、道を以て樂を受け、亦法を聞くことを得。既に法を聞き已つて諸の障礙を離れ、諸法の中に於て力の能うる所に任せて、漸く道に入ることを得。彼の大雲の一切の卉木・叢林及び諸の藥艸に雨るに、其の種性の如く具足して潤を蒙り、各生長することを得るが如し。如來の説法は一相一味なり。所謂、解脫相・離相・滅相なり。究竟して一切種智に至る。其れ衆生あつて如來の法を聞いて、若しは持ち讀誦し説の如く修行するに、得る所の功德自ら覺知せず。

所以は何ん、唯如來のみあつて、此の衆生の種相・體性、何の事を念じ・何の事を思し・何の事を修し・云何に念じ・云何に思し・云何に修し・何の法を以て念じ・何の法を以て思し・何の法を以て修し・何の法を以て何の法を得と云うことを知れり。衆生の種種の地に住せるを、唯如來のみあつて實の如く之を見ても明瞭無礙なり。彼の卉木・叢林諸の藥艸等の、而も自ら上中下の性を知らざるが如し。如來は是れ一相一味の法なりと知れり。所謂、解脫相・離相・滅相・究竟涅槃・常寂滅相にして終に空に歸す。佛是れを知り已れども、衆生の心欲を觀じて之を將護す。是の故に即ち爲に一切種智を説かず。汝等迦葉、甚だ爲れ希有なり。能く如來の隨宜の説法を知つて、能く信じて能く受く。所以は何ん、諸佛世尊の隨宜の説法は、解り難く知り難ければなり。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、

有を破する法王 世間に出現して

衆生の欲に隨つて 種種に法を説く

如來は尊重にして 智慧深遠なり

久しく斯の要を默して 務いで速かに説かず

智あるは若し聞いては 則ち能く信解し

智なきは疑悔して 則ち永く失うべし

是の故に迦葉 力に隨つて爲に説いて

種種の縁を以て 正見を得せしむ

迦葉當に知るべし 譬えば大雲の

世間に起つて 徧く一切を覆うに

慧雲 潤 を含み 電光晃り曜き

雷聲遠く震いて 衆をして悦豫せしめ

日光掩い蔽して 地の上清涼に

霰垂布して 承攬すべきが如し

其の雨普等にして 四方俱に下り

流澍すること無量にして 率土充ち洽う

山川・險谷の 幽邃に生いたる所の

卉木・藥艸 大小の諸樹

百穀苗稼 甘蔗・葡萄

雨の潤す所 豊かに足らざること無く

乾地普く洽い 藥木竝に茂り

其の雲より出ずる所の 一味の水に

艸・木・叢林 分に隨つて潤を受く

一切の諸樹 上中下等しく

其の大小に稱うて 各生長することを得

根・莖・枝・葉 華・果・光・色

一雨の及ぼす所 皆鮮澤することを得

其の體相 性の大小に分れたるが如く

潤す所是れ一なれども 而も各滋茂るが如く

佛も亦是の如し 世に出現すること

譬えば大雲の 普く一切に覆うが如し

既に世に出でぬれば 諸の衆生の爲に  
諸法の實を 分別し演説す  
大聖世尊 諸の天・人  
一切衆の中に於て 是の言を宣ぶ  
我は爲れ如來 兩足の尊なり  
世間に出ずること 猶お大雲の如し  
一切の 枯槁の衆生を充潤して  
皆苦を離れて 安穩の樂  
世間の樂 及び涅槃の樂を得せしむ  
諸の天・人衆 一心に善く聽け  
皆此に到つて 無上尊を觀るべし  
我は爲れ世尊なり 能く及ぶ者なし  
衆生を安穩ならしめんが故に 世に現じて  
大衆の爲に 甘露の淨法を説く  
其の法一味にして 解脱・涅槃なり  
一の妙音を以て 斯の義を演暢す  
常に大乘の爲に 而も因縁を作す  
我一切を觀ること 普く皆平等にして  
彼此・愛憎の 心あることなし  
我貪著なく 亦障礙なし  
恒に一切の爲に 平等に法を説く  
一人の爲にするが如く 衆多も亦然なり  
常に法を演説して 曾て他事なし  
去來・坐立 終に疲厭せず  
世間に充足すること 雨の普く潤すが如し  
貴賤・上下 持戒・毀戒  
威儀具足せる 及び具足せざる  
正見・邪見 利根・鈍根に  
等しく法雨を雨らして 懈倦なし  
一切衆生の 我が法を聞く者は

ちから 力の受くる所に隨つて 諸の地に住す  
あるい 或は人・天 轉輪聖王  
しゃく 釋・梵諸王に處する 是れ小の藥艸なり  
むろ 無漏の法を知つて 能く涅槃を得  
じんづう 六神通を起し 及び三明を得  
ひとりせんりん 獨山林に處し 常に禪定を行じて  
えんがく 緣覺の證を得る 是れ中の藥艸なり  
せそん 世尊の處を求めて 我當に作佛すべしと  
しょうじん 精進・定を行ずる 是れ上の藥艸なり  
またもろもろ 又諸の佛子 心を佛道に専らにして  
つね 常に慈悲を行じ 自ら作佛せんこと  
けつじよう 決定して 疑なしと知る 是れを小樹と名く  
じんづう 神通に安住して 不退の輪を轉じ  
むりようおく 無量億百千の 衆生を度する  
かく 是の如き菩薩を 名けて大樹と爲す  
ほとけ 佛の平等の説は 一味の雨の如し  
しゅじよう 衆生の性に隨つて 受くる所不同なること  
か 彼の艸木の 稟くる所 各異なるが如し  
ほとけ 佛此の諭を以て 方便して開示し  
しゅじゆ 種種の言辭をもつて 一法を演説すれども  
ほとけ 佛の智慧に於ては 海の一滴の如し  
われほうう 我法雨を雨らして 世間に充滿す  
み 一味の法を 力に隨つて修行すること  
か 彼の叢林 藥艸・諸樹の  
そ 其の大小に隨つて 漸く増茂して好きが如し  
しよぶつ 諸佛の法は 常に一味を以て  
もろもろ 諸の世間をして 普く具足することを得せしめたもう  
ぜんじ 漸次に修行して 皆道果を得  
しょうもん 聲聞・緣覺の 山林に處し  
さいごしん 最後身に住して 法を聞いて果を得る

是れを藥艸の 各增長することを得と名く

若し 諸の菩薩 智慧堅固にして

三界を了達し 最上乘を求むる

是れを小樹の 而も增長することを得と名く

復禪に住して 神通力を得

諸法空を聞いて 心大に歡喜し

無數の光を放つて 諸の衆生を度することある

是れを大樹の 而も增長することを得と名く

是の如く迦葉 佛の所説の法は

譬えば大雲の 一味の雨を以て

人華を潤して 各實成ることを得せしむるが如し

迦葉當に知るべし 諸の因縁

種種の譬諭を以て 佛道を開示す

是れ我が方便なり 諸佛も亦然なり

今汝等が爲に 最實事を説く

諸の聲聞衆は 皆滅度せるに非ず

汝等が所行は 是れ菩薩の道なり

漸漸に修學して 悉く當に成佛すべし